

# 幼稚園の保護者組織主催行事に対する 成員の意味付けの変遷： 「幸の会」会報誌におけるバザーに関する記述の分析

Changes in Members' Perceptions of Events Organized by Kindergarten Parents'  
Association: Analysis of descriptions of the bazaar in the newsletters

境 愛一郎<sup>\*1</sup>、栗原 啓祥<sup>\*2</sup>

Aiichiro SAKAI, Hiroaki KURIHARA

## I. 問題と目的

### 1. 保育施設における保護者組織の現状

保育においては、保護者と連携しながら子どもの支援にあたると同時に、保護者自身の願いも受け止め、支えていくことが求められる<sup>1)2)</sup>。一方、保育施設にとって、保護者は一方的な「被支援者」ではなく、子どもを「共に育て合う」パートナーにして、園を取り巻く保育コミュニティの共同形成者となり得る存在であり<sup>3)</sup>、園の文化や実践の構築に関わる重要な主体として位置づけられる。保護者が主体的に活動を展開し、種々の役割を発揮する基盤となるものが、保護者会やPTAに代表される保護者組織である。本来、保護者と教師による社会教育団体であるPTAと、保護者を主な構成員とする保護者会は別物である。しかし、保護者らが参加し、行事等の補助・運営、園や関係各所に対する発信などを行うといった共通点も多くあるため、ここでは保護者組織と総称して論を進めたい。

保護者組織が果たしてきた役割は多岐にわたり、園行事や清掃活動への協力<sup>4)</sup>、園とともに助成金獲得運動や地域社会に対する働きかけを行う<sup>5)</sup>、保護者を園コミュニティの成員として

エンパワメントする<sup>6)</sup>といった、多方面からの保育活動への貢献が報告されている。また、保護者独自で親子のための勉強会や行事を開催する例<sup>7)</sup>、会員による会報や詩集の発行のほか、手芸やスポーツなどのサークル、同窓会組織に派生して活発に活動する例<sup>8)</sup>もみられ、園の内外において、子どもと保護者の生活の充実および教育に寄与している。加えて、活動の一環として、保護者同士で子育てについて語り合う場を設けることで、子育て不安の軽減や親としての成長を促すピアサポートが成立することも明らかにされている<sup>9)</sup>。

こうした一方で、保護者組織に関しては、その強制力や運営の在り方をめぐり、数々の問題が指摘されている。小中学校も含むPTAについては、戦前から続く地元有力者（ボス）による支配<sup>10)</sup>、強制入会と集団内排除の構造、過度な負担の存在<sup>11)</sup>が明らかにされており、法学的な見地からも問い直しが進められている<sup>12)</sup>。また、会長職等を男性が占めながら、日々の労働力のほとんどを女性に依存するジェンダー格差も根強く<sup>13)</sup>、現在の価値観や社会構造との齟齬が生じている。保育施設のPTAや保護者会においても、負担の重さや人間関係の悪化、組織としての存在意義の希薄化、子育てに対す

<sup>\*1</sup> 共立女子大学 <sup>\*2</sup> 清心幼稚園

る価値観の変化といった要因から、組織の解散に至るケースも生じており、運営体制の見直しや入会特典の明確化といった対策に迫られている<sup>14)</sup>。

以上のように、保護者組織は、園や保護者の要請に幅広く応じてコミュニティを発展させると同時に、成員の疲弊や不和の要因でもあるといった二面性を有している。したがって、今日の保護者組織は、種々の保育や地域社会の変容と向き合う中で、葛藤や試行錯誤を経ながら存続しているものと考えられる。

## 2. 保護者組織の変遷に対するアプローチ

現状の保護者組織が、上記のような特性を有するのであれば、その形態や成員意識の変遷を捉えることは、保育コミュニティの潮流をローカルな視点で解き明かすことを意味する。また、重要な変容の起点となった出来事、それに対する都度の対応等を整理することで、今後のコミュニティの維持・発展に資する知見が得られると考えられる。

保護者組織の変遷に関する研究としては、第一に、認定こども園への移行に伴う幼稚園保護者会の再編過程を分析した島津<sup>15)</sup>がある。この研究では、園の体制移行により、既存の保護者会が良くも悪くも慣例化、形骸化している、現状では就労している保育者が参加できず、負担が偏るといった問題が顕在化したことが示されている。さらに、その対応について園と保護者グループが協議を重ねるなかで、活動の中心を担う保護者、周辺にとどまる保護者、保育者の三者の共存を前提としたコミュニティが形成されていく様相を明らかにしている。第二に、キリスト教主義幼稚園の「母の会」について分析した佐藤があげられる。佐藤は、保護者による会議録「母の会ノート」の記述から、1925年から1930年に至る、同会発足当初の活動内容や理念を整理した<sup>16)</sup>。また、会の活動を通じた保護者の育ちを検討するなかで、1960年代前半から続くバザーが、園児数の減少等を受

けてフェスティバルへと形を変えて継続される経緯を示し、直近の保護者会員の意識等を考察している<sup>17)</sup>。

以上の研究は、保護者組織の変容に際して生じる事象の一端を詳細に示している。しかし、焦点的に分析される期間は5年前後であり、長期的変遷については、記念誌等に基づく概説に留まるなど、研究主題とはなっていない。また、会議録や現成員へのインタビューに依拠する部分が大きく、当時の空気感や組織としての試行錯誤、その結果としての各活動に対するスタンスの変容などを捉えるには限界がある。

## 3. 研究目的

本研究は、清心幼稚園の保護者組織「幸の会」が、1983年11月から会員に向けて発行する会報誌に着目し、創刊から今日に至るまでのバザーに関する記述を分析することで、保護者組織主催行事に対する成員の意味付けの変遷を明らかにすることを目的とする。会報誌という性質上、発信側と受け手側の双方に必要性、納得性の高い内容が記載されやすいと予想できることから、当時の価値観や情勢を俯瞰的に解明できると考える。また、バザー等の行事は、多くの成員が動員され、課題等も表面化しやすいと考えられるため、その意味付けの移り変わりを明らかにすることで、組織全体についての考察が可能といえる。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 研究対象について

(1) 清心幼稚園「幸の会」と会報誌「藤棚の下で」

群馬県前橋市に在る清心幼稚園は、アメリカンボードの宣教師らによって1895年に創立されたキリスト教精神に立脚する私立幼稚園である。創立から長らく個人立幼稚園として運営されてきたが、地域の動向などを踏まえ1969年に学校法人へと移行、2015年には幼保連携型認定こども園と形態を変えて今日に至ってい

る。保育としては「子どもの視点に立ち、子どもの立場で考える」という発想のもと、子ども主体の探究活動を軸に、町やアーティストと積極的に対話する活動が特徴的である。2023年4月時点の保育定員は95名（1号15名、2号50名、3号30名）となっている。

清心幼稚園の保護者組織を、園の記念誌<sup>18)</sup> 19)とwebサイト<sup>20)</sup>から整理する。記録上最も古い保護者組織は、1898年に活動が確認できる「母の会」である。同会の趣旨は、母親教育と伝道にあるとみられ、宣教師も交えた児童福祉や家庭生活に関する勉強会を定期的に開催していた。しかしその後、アメリカンボードからの資金提供が減少したことを受けて（1933年に打ち切り）、1930年に「清心幼稚園後援会」が結成される。以降、同会はアメリカンボードに代わる園の後ろ盾として、各種行事への協力や寄付を行うこととなる。さらに、1969年の学校法人化、後述する1970年の園舎改修事業を契機に、園と保護者の協力体制の再構築が促され、1971年に「幸の会」が発足する。「幸の会」は、保護者と教職員からなり、キリスト教主義の幼児教育の振興を図るといったPTAとしての性格を有する。ただし、実質的な主体は保護者であり、園行事のサポートのほか、バザーや講演会といった主催行事の実施、各種保護者サークルの運営などを活発に行っている。いずれにせよ、「幸の会」は、清心幼稚園では初となる今日的な特徴をもった保護者組織として位置づけられる。

「幸の会」の活動の一つに、会報誌「藤棚の下で」の発行がある。その目的は、会員が広く園生活や「幸の会」の活動を知るための広報、会としての活動の記録・継承であり、1983年11月に創刊、以降4か月～6か月間隔で全会員に配布され、2023年度9月時点では第95号まで発行されている。保護者から選出された編集委員会が製作にあたり、2015年度からは印刷会社に印刷、製本作業を委託している。これまでに何度か誌面構成の見直しが図られてお

り、創刊号はB5版の8ページ構成、その後、内容が拡充され、2023年度ではA4版で24ページ前後の構成となっている。掲載内容としては、バザーをはじめとした直近イベントの告知および報告、サークル活動の紹介、保護者に関心を寄せるテーマの特集など時節に応じて多種多様である。例として、第50号（2003.12）では、「お弁当」特集として、編集委員会が会員に行った調理時間や品目に関するアンケートの結果が詳細に示され、締めくくりに当時園長による短いエッセイが掲載されている。

## （2）清心幼稚園のバザー（現 清心フェスティバル）

本研究では、会報誌の記述からバザーの意味付けについて捉えるため、ここでは基本的な解説のみ行う。第1回のバザーは、1970年に開催された。その目的は、園舎大ホールの床下改修費用の調達であり、半ば園側が保護者に依頼する形で、地域住民を招いて手作り品の販売を行った<sup>21)</sup>。先述の通り、この一件は、翌年に「幸の会」が発足するきっかけともなっており、以降、バザーは11月上旬に隔年で開催される「幸の会」主催行事として定着していく。「愛と真心と奉仕」の精神を基本に、売上金の半分は園に寄付、もう半分は「幸の会」および派生サークルの運営資金として活用されている。1994年に現在の清心フェスティバルに名称変更され、2014年度からは園との共催行事に改められた。なお、2020年度、2022年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により開催されていない。

## 2. 分析方法について

### （1）対象記事の抽出

創刊号（1983.11）から第90号（2021.3）までに掲載された記事のうち、バザー（清心フェスティバル）に言及している記事を抽出する。対象記事には、見出しに直接「バザー」の語を含むもののほか、第41号（2000.3）掲載の刺繍サークルの紹介記事「今年はバザー向け

製作(刺し易い物)も入りますが、半製品(ティッシュケース、ポーチ、ブローチ他)の製作も自分のペースで進めていただけます」のように、部分的にバザーに触れた記事も対象とする。最終的に、全55件の記事が抽出された。

## (2) 対象記事の分析

以上の記事を熟読するとともに、それぞれの発行時期、著者、タイトル、特徴的記述の抜粋または要約を表に整理する。並行して、記事の内容種別ごとに分類する見出しを作成し、これも表に記載した。以上を、園および「幸の会」の沿革と照らし合わせながら分析することで、当該行事に対する成員の意味付けの変遷を明らかにする。なお、各沿革については、主に園の90周年記念誌<sup>21)</sup>、110周年記念誌<sup>22)</sup>、図書館に保存される歴代バザー実行委員会が作成した資料、清心幼稚園に勤務する第二著者(2002年度～2009年度は事務職員、2011年度から幼稚園教諭、現副園長)の個人記録を参照する。

# Ⅲ. 結果と考察

## 1. 結果の概要

バザーに対する成員の意味付けの変遷は、大きく4期に整理できた。また、記事の内容種別は、趣旨説明なども含む「協力呼びかけ」、バザー前後での「準備経過報告」と「実施報告」、個人の体験や思いを綴った「参加体験談」、その時点までの「歴史説明」、「その他」の6種に大別された。時期区分ごとの記事情報、園や「幸の会」の主要な動きを整理したものが表1である。記事情報中の著者については、第二著者が寄稿したものを除いて実名を伏せ、当時の役職のみを記している。以下では、バザーに対する各期の意味付けの特徴について、会報の引用等を交えながら検討する。その際、個別の記事に言及する際は、表中の通し番号をカッコ内に示す。また、適宜注釈を加える。

## 2. 時期区分ごとのバザーに対する意味付け

### (1) 中核行事としての焦点化と歪み(1983～1993)

この期間では、全25件と最も多くの関連記事がみられ、バザーが「幸の会」にとって特に重要性の高いトピックであったといえる。創刊号(1983.11)では、会長による「創刊によせて」<sup>注1)</sup>、園長による「藤棚に寄せて」に続き、副会長による「バザーについて」(1)が掲載されている。先の二点が、創刊に際した挨拶といった趣旨であるのに対し、この記事は、新入園児保護者に宛てて、行事の性格を説き、参加を促す意図で執筆されている。

今年入園された年少組のお母さま方に清心幼稚園のバザーとはどんな性質のものか、少しお話しいたします。まず頭においていただきたいことは、主催者は幼稚園(園長先生や諸先生方)ではなく、幸の会、すなわち、私たち母親だということです。約二百名のお母さま方全員の心からの協力で成り立つバザーなのです。(中略)特に手芸部の準備は何か月も前から進められ、「手作りバザー」の名にふさわしく、小さな弟妹のいらっしゃる方も皆さん一生懸命ミシンを踏んでくださいます。(中略)皆さま、ぜひ積極的に参加してください。分室でのサークル活動、色々な方とお友達になれて、楽しいですよ。

この記事は、同期間におけるバザーに対する性質を網羅的に表している。第一に、園ではなく保護者、とりわけ母親が主体であること。第二に、保護者全員の協力が前提であること。第三に、負担を厭わない、むしろそこに意義があること。第四に、手作り品の出品を原則とすること。第五に、交友関係や趣味の広がりや付加価値とすることである。こうした内容は、この後のバザー前後に発行される号で度々繰り返されることとなる。

1984年度バザー開催直前に発行された第3



幼稚園の保護者組織主催行事に対する成員の意味付けの変遷

表1 会報誌に掲載されたバザー関連記事一覧と園の沿革など

No.	発行年	月日	号	頁	著者	タイトル	記事種別	関連する園の動きなど
(1) 中核行事としての焦点化と歪み (1983~1993)								
1	1983	11/10	1	2	副会長	バザーについて	協力呼びかけ	「藤棚の下で」創刊
2	1984	11/1	3	1	会長	清心幼稚園のバザー	準備経過報告	
3	1984	11/1	3	1	前会長	バザーによせて	参加体験談	
4	1984	11/1	3	8	各部代表	こんなにたくさんできました!	準備経過報告	
5	1986	7/15	7	1	会長	清心幼稚園のバザー	協力呼びかけ	
6	1986	7/15	7	1	前会長	バザーによせて	協力呼びかけ	
7	1986	7/15	7	2	園長	清心幼稚園のバザーの歴史	歴史説明	
8	1986	7/15	7	3	各部代表	ただいま製作中	準備経過報告	
9	1986	7/15	7	4	前実行委員	貴重な経験と充実感	参加体験談	
10	1986	7/15	7	4	前実行委員	みんなの心がひとつに	参加体験談	
11	1986	7/15	7	6	広報委員	バザーマップ	その他	
12	1986	12/22	8	1	会長	第十回バザーを顧みて	実施報告	
13	1986	12/22	8	1	園長	バザーを終えて	実施報告	
14	1986	12/22	8	2-3	各部代表	バザー便り完結編	実施報告	
15	1986	12/22	8	8	理事	バザーに参加して	参加体験談	
16	1988	7/5	12	3	実行委員	バザーをクリエート!	協力呼びかけ	
17	1988	7/5	12	4	各部代表	バザー各部の紹介Ⅰ ただいま製作中!	準備経過報告	
18	1988	7/5	12	6	前役員	バザー各部の紹介Ⅱ	準備経過報告	
19	1988	7/5	12	8	広報委員	編集後記	協力呼びかけ	
20	1989	3/7	13	5-6	各部代表	清心幼稚園バザーを終えて	実施報告	
21	1990	7/11	17	5	会長	バザーをエンジョイ!!	協力呼びかけ	
22	1991	3/5	18	1	会長	卒業に寄せて	実施報告	
23	1991	3/5	18	6	各部代表	第十二回バザー	実施報告	
24	1993	3/16	23	1	参加者	なし	実施報告	
25	1993	3/16	23	1	参加者	なし	実施報告	
(2) 子どもも大人も楽しめる行事へ (1994~2003)								
26	1995	3/4	28	13-15	各部代表 参加者	清心フェスティバル	実施報告	清心フェスティバル (1994年度) 園100周年記念事業
27	1996	7/4	32	10	各部代表	清心フェスティバル96	協力呼びかけ	初の女性会長 園舎新築に向けた議論開始
28	1997	12/6	35	9	各文化委員	文化部よりお知らせ	準備経過報告	
29	1998	7/10	37	12	会長	清心フェスティバル98	協力呼びかけ	会報誌「特集」設置
30	1999	3/6	38	3	各参加者	清心フェスティバル98	実施報告	
31	2000	3/4	41	19	刺繍サークル	刺しゅう	準備経過報告	
32	2000	7/15	42	5	各部代表	フェスティバルに向けて	協力呼びかけ	
33	2001	3/5	43	3	参加者	フェスティバル	実施報告	
34	2001	3/5	43	18	各サークル	サークルの一年	実施報告	
35	2003	3/7	48	5	広報委員	清心フェスティバル (平成十四年一月九日)	実施報告	仮園舎保育
36	2003	3/7	48	18-19	各サークル	サークル活動 この一年	実施報告	
(3) 原点回帰と現代的在り方の模索 (2004~2013)								
37	2004	7/15	52	10	不明	フェスティバルー手作り品のご紹介ー	その他	新園舎完成 保育定員減少 (160名→105名) 「幸の会」会費徴収開始
38	2005	3/10	53	14-15	各サークル	活動を振り返って サークル長に伺いました	実施報告	園110周年記念事業
39	2006	7/17	57	6-9	実行委員長	今年は2年に一度のフェスティバル イヤー フェスティバル!	歴史説明	特集 フェスティバル
40	2006	7/17	57	9	栗原啓祥	バザー (フェスティバル) の思い出	協力呼びかけ	
41	2008	7/17	62	7-8	実行委員長	清心フェスティバル~受け継がれていく想い~	参加体験談	
42	2008	7/17	62	9	参加者	フェスティバルの思い出	歴史説明	会報誌「特集」消滅
43	2008	7/17	62	9	参加者	初めてのフェスティバル	協力呼びかけ	
44	2010	7/16	67	8-9	各実行委員	心をひとつに...清心フェスティバル~ 愛と、真心と、奉仕の、キリスト教精 神のもとに~	参加体験談	
45	2011	3/17	68	14	各実行委員	フェスティバル実行委員	歴史説明	
46	2012	7/19	72	10	各実行委員	子どもに笑顔を 清心フェスティバル ~愛と、真心と、奉仕の、キリスト教 精神のもとに~	準備経過報告	
47	2012	7/19	72	11-12	各実行委員	今回のフェスティバルの想いを3人 のブース長さんに聞いてみたゾ	歴史説明	
48	2013	3/16	73	16-17	各実行委員	フェスティバル実行委員会	準備経過報告	
(4) 園との共催による総合型イベント (2014~2021)								
49	2015	3/13	78	記載なし 1頁	広報委員	清心フェスティバル 2014. 11. 8	実施報告	園との共催体制 (2014年度) 認定こども園に移行 (2015年度)
50	2015	3/13	78	記載なし 2頁	各本部役員 各文化委員	清心フェスティバルを振り返って	実施報告	
51	2017	3/10	82	記載なし 2頁	各文化委員	役員活動この一年 文化委員	実施報告	
52	2017	3/10	82	記載なし 見開き	文化委員長	フェスティバル特集	実施報告	
53	2019	3/11	86	記載なし 見開き	広報委員	清心フェスティバル2018	実施報告	
54	2019	3/11	86	記載なし 2頁	各本部役員 各文化委員	本部役員 文化委員	実施報告	
55	2021	3/10	90	記載なし 1頁	各サークル	魅力いっぱい サークル活動	その他	新型コロナのため中止 (2020年 度)

号(1984.11)では、ともに男性である会長、前会長により、バザーが母親たちの努力の賜物であること<sup>注2)</sup>、会員同士の友情を深める機会であることが強調され(2, 3)、各部による出品物の準備報告と寄贈の呼びかけが行われている(4)。続く1986年度バザー前の第7号(1986.7)では、7件もの記事が見られ、それぞれの視点からバザーの意義が語られている。なかでも、「バザーによせて」(6)では、「家庭に眠る不用品を集めただけのもの」を販売する性質のバザーを暗に否定し、「おかあさまがたが、てまひまをかけて作り上げた物」を扱うことが、「愛と真心と奉仕」であると強調している。キリスト教精神に基づいたこの表現は、以降バザーの歴史を振り返る記事で引用されるキーワードとなる<sup>注3)</sup>。さらに、事後の第8号(1986.12)では、会長による「第十回バザーを顧みて」(12)のなかで、バザーの収益は子どもの育成のために園に寄付されたことと合わせて、「会員全員参加の様子で和気あいあいと楽しくやっていた」ことが成功の第一条件であり、チームワークが不可欠と念押しされている。実施報告(13, 14)としても、無理を押して協力する保護者の姿が象徴的に紹介されている<sup>注4)</sup>。

ただし、バザーに向けた焦点化が著しいなか、それに対する反動ともとれる動きも散見されるようになる。第8号(1986.12)の締めくくりとして、三人の子どもの保護者である理事が記した参加体験談「バザーに参加して」(15)では、次のように綴られている。

今回、バザーとその反省会に参加して思った事は、保護者全員が、もっと、積極的に参加できるようなバザーにしたいという事でした。(中略) 伝統や慣例を重んじるばかりに、保護者個々の才能や意欲を見失っているのではないかということです。具体的には、手作り品では、園外に講師を求めるのではなく、保護者間でも充分に教え合って作品作りがで

きる。(中略) 事前に収益の用途などを知らせていただければ、私達は、もっと意欲を燃やすでしょう。どのような形で、園側に奉仕、寄付したいかをもう一度考え直してもよいのではないのでしょうか？

以上からは、現状として積極的に参加できない保護者が存在すること、運営体制が集団主義的あるいは統制的であること、収益金の用途をはじめ行事の目的に疑義が生じていること<sup>注5)</sup>が読み取れる。こうした問い直しを求める意見がどの程度あったかは定かではない。しかし、以降の記事では、そうした不満の声への配慮ともとれる記述が明確に増えていく。

例えば、第12号(1988.7)では、これまでと同様に、目前に迫る1988年度バザーへの協力を要請しつつ「バザーをクリエート！」(16)と題し、「自分の個性を作品の中に織り込んでいくこともできます」、「お互いの立場を尊重して、やって良かった、楽しかった、大いにプラスになったというバザーに」といったように、これまで希薄だった個への言及がみられる。加えて、交友関係や趣味が広がるといった付加価値も強くアピールされている。この傾向は、1990年度バザーで一層顕著になり、第17号(1990.7)の協力呼びかけ記事「バザーをエンジョイ!!」(21)では、「あまり無理のない形で全員の方に参加していただく」方針が示されている。個人の熱意や状況に応じた協力方法を許容し<sup>注6)</sup>、保護者自身も行事を楽しむことが目的に置かれた点も同記事の特徴である。以降では各事後号での言及は限定的となり、第13号(1989.3)では、1ページ中に役員ら総勢7名が簡潔にメッセージを寄せる形式(20)、第18号(1991.3)では、同様の形式(23)のほか、「卒業によせて」(22)において催しの一つとして例示されるにとどまる。そして、1992年度バザーについては、第23号(1993.3)の各委員の挨拶(24, 25)で「大盛況のうちに終了」したと遺されるのみである<sup>注7)</sup>。

先述の通り、「幸の会」はバザーを契機に発足した組織である。したがって、バザーは会の存在理由そのものといっても過言ではなく、バザーから保護者の活動や仲間関係が生じ、バザーに向かってそれらが集約される構造により、清心幼稚園の保護者として生活様式、アイデンティティが形作られていると考えられる。しかし、こうした構造は、組織の画一化と行事の自己目的化をもたらし、バザーを中核行事として大々的に扱う体制は、表面化した課題に向き合うなかで、次第にトーンダウンしていったと考えることができる。また、奉仕のための収益の得る慈善市<sup>注8)</sup>という既存の意味に加えて、自分たち自身が楽しみ、成長する行事としての比重が大きくなっていった時期とも位置付けられる。

(2) 子どもも大人も楽しめる行事へ（1994～2003）

自分たちも楽しむ行事という考え方は、1994年度に清心フェスティバル（以下、フェスティバル）として体现される。フェスティバルでは、品物を作って来場者に販売することがメインであったバザーを見直し、子どもと保護者も含む大人の双方が楽しめる行事へと再編が図られた。かつての手芸品部などはバザーコーナーに統合され、遊び等を企画する子供コーナー、食堂コーナーが拡充された<sup>注9)</sup>。基本的に、保護者らはこのうちのどれかに属し、自身ができる範囲での協力を行う。こうした転換の背景には、翌年に控えた創立100周年記念事業のために「幸の会」のリソースが不足していたこと<sup>注10)</sup>、それをきっかけとして改革が打ち出しやすいタイミングであったことが考えられるだろう。

このため、1994年度フェスティバルに関する会報での言及は、第28号（1995.3）の実施報告「清心フェスティバル」（26）のみである。しかし、各部の報告において「全員が集まって制作をしなかった」や「単なる大人中心の行事ではなく子供コーナーも充実して、子供たちに

とっても大変楽しい思い出になった」といった、行事内容の変化がうかがえる記述がみられる。その後、2002年度を除く偶数年度の7月発行号では、会長および各コーナー代表による、進捗報告を兼ねた協力呼びかけが掲載されている。ここでは、第37号（1998.7）「清心フェスティバル 98」（29）中の「皆様の負担を減らし、売り上げは伸ばしたい。これは本部の本音です。知恵を出し合って仕事の負担を減らしましょう。個々のご事情もあります。無理は禁物です。」のように、協力負担に対する配慮が意識されている。加えて、第38号（1999.3）に寄せられた実施報告（30）では、以下の記述がみられる。

防犯対策、分刻みのスケジュール、以前の資料を眺めながら私達が出した結論は、もっと楽しんでやろうということ。当日親子で楽しめる時間を生み出す為の人数調整。それに並行してバザーコーナーとしての制作活動開始。（中略）今後、それぞれの時代にあう、そして、親子にとってフェスティバルが楽しい思い出になれば良いと思います。

ここでは、親子で楽しめるフェスティバルという方針が、成員たちの主体的な決断であることが確認できる。また、各サークルの活動報告（31, 34, 36）では、フェスティバルに向けた準備、出店・講演の様子が紹介されており<sup>注11)</sup>、それぞれの成果を披露する場としても機能している。この期間のバザーでは、とすれば画一的とされた前期と異なり、成員自体が、それぞれの関わり方で楽しむ行事としての意味付けが定着しているといえる。会報においても、前期のように開催前後に複数の関連記事が掲載されることは減り、数ある会の活動、関心事の一つという位置づけになっている。2002年度フェスティバルの実施報告（35）は、タイトルと写真一枚のみの記事であり、そうした傾向が明確に表れている。

### (3) 原点回帰と現代的在り方の模索(2004～2013)

2004年度フェスティバルは、激動のなかでの開催となった。第一に、2004年度完成の新園舎建設に際し、2003年度は仮設園舎での保育となり、「幸の会」のサークル活動は大幅な縮小を余儀なくされた。第二に、翌年の創立110周年記念事業と並行して準備を進める必要があった。第三に、保育定員の改定(3学年6クラス160名から3学年6クラス105名)により「幸の会」成員が減ることを受けて、会費を徴収することで、バザー収益に頼らないフェスティバル開催と組織の運営維持の両立を図ることとなった。結果、2004年度フェスティバルは小規模での開催となり、今後の運営体制にも見直しが加えられることとなる。当時の会報誌上での扱いは、手作り品の作り方解説(37)にとどまる。ただし、のちの創立110周年記念誌<sup>23)</sup>では、当時の会長が次のように状況を振り返っている。

幸の会は会費をいただくこととなり、運営全般の見直し、新しいルール作り、サークルや委員会活動の再考、活動場所としてお借りする3階スペースの利用方法、そして清心フェスティバルの企画と、たくさんの方と共に連日のように検討を重ねました。(中略)フェスティバルは、企画内容を全面的に見直し、たくさんの方に楽しんでもらえることを願いました。過去のようにたくさんの企画はなかったものの、一つ一つの事に熱意を持って取り組み、当日は笑顔あふれる、ハートフルなフェスティバルとなりました。

また、創立110周年事業の一環として、幼稚園と「幸の会」の共同企画「みんなであそぼう!」が実施された。園内に11種の遊びコーナーを設け、いつでもどこでも遊べることをコンセプトとしたこの企画は大いに賑わい、「間違いなく来年度のフェスティバルの前身となっ

た」<sup>注12)</sup>。こうした検討を経て迎えた2006年度フェスティバルでは、直前の第57号(2006.7)で特集が組まれ、実行委員長による歴史説明と参加呼びかけ(39)が4頁にわたって掲載された。少々長い<sup>が</sup>、以下特徴的な部分を引用する。

このフェスティバルは、幸の会の歴史と共にあります。(中略)時代の流れにあわせ、フェスティバルのあり方を変えていくことは、必要な事と思います。しかし、根底に流れる考え方を変えることは出来ませんし、する必要がないのです。皆さんには、もう一度愛と、真心と、奉仕のキリスト教精神のもとにという言葉に胸に刻んでいただき、今年のフェスティバルに臨んでももらいたいと思います。(中略)全員で心をひとつにしてまた新たな歴史を刻みましょう。ただ、私が過去にそうしてもらったように、妊婦であったり、小さい子供を抱えていたり、病気であったり等々、そのような人たちを、みんなで支え、楽しく過ごせるように、協力していくことも幸の会会員の中に流れてきた伝統であると思っています。

記事では、本稿でも触れてきた1970年から始まるバザーの歴史が、詳細に振り返られている。それを踏まえた結論は、「愛と真心と奉仕」の精神に基づき、一致団結して取り組む中核行事路線への回帰と、個々人の事情を尊重し、全員が楽しめることをモットーとするフェスティバル路線の折衷ともいえるスタンスであった。これ以降、フェスティバルイヤーとなる2008年度、2010年度、2012年度の7月発行号では、同様にバザーの歴史の整理がなされ(41, 44, 46)、そのうえで準備経過の報告など(42, 43, 45)が行われている。こうした情報発信の背景について、以下の第52号(2008.7)「清心フェスティバル～受け継がれていく想い～」(41)の記述から推察することができる。



現在は幸の会の会費を皆様から集めさせていただいておりますので、売り上げのことを考慮しなくてもよくなりました。しかし、フェスティバルを通して、子どもたちのために何か役に立つこと、意味のあることができるのではと考えております。(中略) 月日が流れても、歴史を刻んできたこの場所でフェスティバルの歴史を次の世代につないでいく意味があるというわけです。

かつてのバザーの主目的は、収益を上げ、幼稚園への寄付と「幸の会」の運営資金に充てることであった。したがって、会費制への移行は、行事の必要性を根本から揺るがす事態である。そうした際に、成員たちの行事に対する意欲をつなぎ止め、開催の大義名分となったものが、伝統とその継承であったといえる。また、大きな転換を迫られるなかで、「幸の会」の原点となったバザーに回帰することは、会の求心力や成員の帰属意識を維持するうえで不可欠であったとも考えられる。しかし、実際の運営では、上記のように個々の事情への配慮が重視されるとともに、一人一品の手作り品の回収を取りやめ、食堂コーナーには外注ケータリングを取り入れるといった負担軽減策がとられた<sup>注13)</sup>。2008年度フェスティバル以降では、園が外注業者との折衝や前日準備の一部を手伝うようになり<sup>注14)</sup>、実質的な部分では、伝統にとらわれない現代的なあり方が模索された。それは、「主催者は幼稚園(園長先生や諸先生方)ではなく、幸の会」(1)という姿勢の軟化でもある。

#### (4) 共催イベントとしてのフェスティバル (2014～2021)

2014年度フェスティバルの開催においても、保護者の負担軽減はネックであった。翌年には幼保連携型認定こども園への移行を控え、今後さらに同規模での開催が困難になることから、実行委員会では園側も交えた協議が重ねられ

た<sup>注15)</sup>。結果として、フェスティバルを「幸の会」と清心幼稚園の共同開催とする方針が決定された。飲食関連企画は、園とケータリングが担うこととなり、「せいしんキッチン」として教職員が本格動員された。園の発案・仲介によるアーティストらのワークショップやジャズライブといった企画も取り入れられ<sup>注16)</sup>、フェスティバルは、幼稚園を舞台にした地域の総合型イベントとして刷新された。「幸の会」の役割は、全体運営とバザー企画、サークル発表など過去と比較して限定的となった。2016年度フェスティバルでは、会場を隣接する公園(前橋公園)、児童遊園(るなばあく)にまで拡大し、園と関係する個人や団体が一堂に会する地域イベントとしての傾向が強まる<sup>注17)</sup>。2018年度は若干の規模縮小がなされたが、以上の方針は踏襲されている<sup>注18)</sup>。

園との共催になったことを受けてか、「藤棚の下で」における事前の協力の呼びかけや歴史の説明はみられなくなる<sup>注19)</sup>。掲載内容は実施報告が中心となり、本部役員などを務めたメンバーが短く感想や謝辞を記している(50, 51, 54)。また、図1のように、当日の写真や会場マップをカラーで載せた報告も各年でみられる(49, 52, 53)。

図1で紹介される6コーナーのうち、4コーナー(1階の一部、おおてまちこども園、園庭、フードコーナー)を教職員やアーティスト、地域業者が担っている。「幸の会」主催行事としての面影は薄く、園行事の一つとして保護者の参加者化、協力者化が進んでいる点も否めない。他方で、図1のホールにて、「幸の会」としてワークショップが主催されているように、行事を通じて知り合ったアーティストらが提案する活動を取り込み、自ら発信するといった新たな主体性の発露もみられる。このような活動は、フェスティバルを超えてみられ、例えば、2019年度に園がアーティストと連携して開催した「スーパーワークショップパーティー」では、プレ企画を「幸の会」文化委員が担



図1 第86号 (2019.3)「清心フェスティバル 2018」(53)

当している<sup>注20)</sup>。地域やアーティストとの出会いによって生まれる経験は、清心幼稚園が長年にわたり重要視してきた保育のテーマであり、以上のような動きは、保護者がそうした実践の営みのなかに、発信者として参加していくことを意味する。「幸の会」にとって、園と共催するフェスティバルは、園を取り巻く文化のハイライトにして、自らも参画して空間上にそれらを表現したある種のインスタレーションとも位置付けられる。

なお、2020年度のフェスティバルは、新型コロナウイルス感染症の影響で中止となり、会報では、サークル紹介(55)で本来の予定の一つとして触れられるのみであった。

#### IV. 総合考察

##### 1. 保護者組織主催行事に対する成員の意味付けの変遷

前章の検討を踏まえ、会報誌「藤棚の下で」の検討から明らかとなった「幸の会」成員のバザーに対する意味付けの変遷を簡潔に整理する。

「幸の会」と主催行事であるバザーの関係は、保護者組織の発足以前に主催行事が存在していた点で特徴的なケースといえる。その点では、当初は成員が行事に対して意味付けを行っていたというよりも、行事が組織、成員といった概念を形作り、保護者に対し「愛と真心と奉仕」の精神のもとに団結した我々といった意味を与えていたといえる。このことは、「藤棚の下で」

創刊号における最初の具体的なトピックがバザーであり、その性格を力強く説く内容であった点からも読み解ける。発足から10年余りの「幸の会」黎明期において、バザーは成員らに存在理由と園の保護者としての在り方を示す指針として意味付けていたと考えることができる。合わせて、母親の力が強調される記述からは、社会全体として片働き世帯が主流<sup>24)</sup>であった当時の幼稚園児の母親にとって、行事とそこから派生する活動が、彼らに有意義な居場所と役割を提供するものとして機能していたとも考えられる。

しかし、そうした発足当初に付与された意味付けは、年月の経過とともに本来的な意義を失い、成員の負担感と単に伝統や慣例として開催することへの疑問が増大していく。奉仕の価値があいまいになること、バザーが成員間の不和を招くことは本末転倒であり、行事の継続のためには、現成員が新たに意味を付け直す必要が生じてきた。会報誌における問い直し(15)や「バザーをクリエート！」(16)等の記事は、そうした試行錯誤の過程といえる。その一つの結論が、自身も含む全員が楽しめる行事という意味付けであり、創立100周年を控えた1994年、子どもと大人で楽しむ清心フェスティバルとして体现された。見方を変えれば、新たな意味付けを模索し続けてきたことが、100周年事業によるリソース不足のなかで行事を継続する発想に自然な形でつながったともいえるだろう。

さらに、2004年度以降では、「幸の会」会費徴収の開始により、会の運営資金を得るという目的の片翼が失われた。加えて、成員数の減少により、自分たちが楽しむ行事の実現がより困難になった。このときに、フェスティバルの開催を支えたものが、受け継ぐべき「幸の会」の伝統という、バザーを全体を中心に置いていた時期(1983～1993)への回帰ともいえる意味付けであった。他方、全員が楽しめる行事としての意味付けも堅持されており、フェスティバルの意義を、バザーの伝統が補強した形とな

る。2008年度以降では、園や外注業者の協力を仰ぐなど、開催以来の「幸の会」主催行事としての姿勢を緩めているが、楽しむこと、行事を次の世代に引き継ぐことを両立する決断であるとすれば辻褄が合う。

認定こども園への移行を見据えた2014年度フェスティバル以降では、園やアーティストらと共催するイベントとしての面が大きくなり、会報誌において、その性格や意義が語られることは少なくなる。一方で、「幸の会」の活動が消極化しているわけではなく、行事を通じて得た経験をもとにワークショップを主催するなど、フェスティバルという範囲を超えた発信が生じている。また、バザー発足時から変わらず、フェスティバルは各サークルの成果発表の場となっている。前章で述べた通り、現状のフェスティバルは、園を起点に生じているあらゆる文化が結集する場であり、「幸の会」成員が、自身が園文化の一員であることを実感する機会として意味付けられる。

そして、全期間を通した不変の意味付けとして、バザー(フェスティバル)は、直接・間接的に園での子どもの育ちに対して貢献できる機会という点があげられる。収益金で園の設備や備品を整えること、楽しめる遊びコーナーやワークショップを企画することなどのほとんどは子どもに帰結する。また、収益が不要となった際に、行事を開催する理由となったのは「子どもたちのために何か役に立つこと、意味のあることができるのでは」(41)という願望であった。保護者組織にとって行事を主催することは、保育者らと子どもを「共に育て合う」<sup>25)</sup>主体性の表出であるといえる。

## 2. 意味付けの変容をもたらす「断絶」と「移行」

「幸の会」成員の主催行事に対する意味付けの劇的な変容は、1994年度の創立100周年行事に伴う関心の分散、2004年度の混乱(園舎新築と仮園舎保育、保育定員の減少と会費徴収開始、創立110周年記念事業の開催)、2015年



度の幼保連携型認定こども園への移行といった自身だけではコントロールできない、いわば不可避的な出来事の後に生じている。Zittoun, T<sup>26)</sup> は、これまでの習慣を破壊し、環境への新たな調整を求める出来事を「断絶 (Rupture)」、 「断絶」によって引き起こされる変容のプロセスを「移行 (Transition)」として、主体が新たな環境と持続可能な関係の構築を目指す動態として着目している。「幸の会」の主催行事に対する意味付けの変容は、先にあげた出来事(「断絶」)によって生じた環境に対し、バザーという会のアイデンティティの一つといえる要素を、どのように置き直すかといった試行錯誤(「移行」)としても理解できる。

1994年度のフェスティバル移行前から、個々人が楽しむ行事としての傾向が表れているように、行事に対する意味付けの緩やかな変容、あるいは新たな意味付けの元になるアイデアは「断絶」以前にもみられる。一方で、「断絶」のあとには、意味付けの大きな変容、アイデアの積極的な活用が促される可能性が高い。したがって、保護者組織で種々の意味付けの変容が起こるタイミングは、ある程度予測することができる。昨今における、新型コロナウイルス感染症による行事の中止、開催方法の見直しは、まさにそうした「断絶」の一つとなり得るため、今後の保護者組織の動向については、より一層注視が必要といえるだろう。

### 3. 今後の課題

本研究では、保護者組織の会報誌に着目することで、当時の成員らが、どのように行事を捉え、どういった意図や配慮のもとで発信していたかを明らかにすることができた。ただし、バザー(フェスティバル)関連の記事に限った分析であったため、他の活動や行事の扱い方との比較等は行っていない。会報を根拠とする方法については、本研究にて有効性が確認されたため、異なるトピックについても分析を行い、保育を取り巻く文化の変容について複合的に明ら

かにしていきたいと考える。

### 注

- (注1) 本記事では、本誌は有志の発案により「幸の会」の活動を文字にして継承する広報誌であり、心の交流と大切な情報の要となることを目指すとある。
- (注2) 記事(2)では、「大勢のおかあ様方のご協力、本当にありがとうございます」「かいがいしく働く母の姿」といった記述、記事(3)では「おかあ様方が企画・準備し一つ一つ心をこめて制作」と、行事の大部分を母親が担うことを示す記述がみられる。
- (注3) 例として、1996年の記事(27)、2006年の記事(39)で同じフレーズの使用がみられる。
- (注4) 記事(13)では「時にはご自身の多忙な家事や育児までなげうって」参加した母親、記事(14)では「赤ちゃんをおんぶして参加して下さったお母様、ケガにもめげず参加して下さったお母さま」をあげ、協力への感謝を示している。
- (注5) 第二著者によれば、バザーの収益を、サークル活動の補助、幸の会主催の文化活動、バザーの準備費等に充てており、一部の保護者にとってはその用途に不公平感を抱くケースがあったという。
- (注6) 最低限の協力として一家族一点の手芸品の寄贈、余裕があれば理事や分室作業者の手伝い、中心メンバーはほとんど毎日活動という段階がみられる。
- (注7) 記事(24, 25)は、見出しや筆者の役職等が付されない一保護者の振り返り記事である。
- (注8) 「愛と真心と奉仕」の精神をとりあげた1984年の記事(3)では、「バザーとは端的に言えば慈善市で、「公共または社会事業などの資金を集める目的で催す市」ということです」とその性質が明言されている。



- る。
- (注 9)「清心フェスティバル」(26)の記述より。
- (注 10) 100 周年記念事業として名簿発行、年表作成、ビデオ作製、写真展、歌製作が企画され、「幸の会」としても上記行事の補助やコーラス発表を行った。
- (注 11) 例えば、記事 (34) では、編み物、刺繍、人形劇サークルでフェスティバルへの出店、公演報告がある。
- (注 12)「創立 110 周年記念誌」(引用文献 (19))における当時の会長の記述より。また、フェスティバルに向けて行われたアンケートでは、多くの成員から「みんなであそぼう！」を参考にする意見があがったともある。
- (注 13) 2016 年度フェスティバル実行委員会が作成した「清心フェスティバルの経緯」より。
- (注 14) 第二著者の記録より。
- (注 15) 当時実行委員会作成の「2014 年度フェスティバル関係資料、書記ノート」によれば 5 月 2 回、6 月 1 回、7 月 1 回、9 月 1 回、10 月 2 回の委員会が開催されている。
- (注 16) 清心幼稚園では、110 周年事業の一環として 2005 年に園内ジャズライブを開催している。また、地元アーティストらとの連携した「スーパーワークショップパーティー」を開催（主催 清心幼稚園、協力 幸の会）しており、2014 年度以降、清心フェスティバルにもその要素が取り入れられた。
- (注 17) 当時実行委員会作成の「2016 年度フェスティバル関係資料、書記ノート」より。
- (注 18) 当時実行委員会作成の「2018 年度フェスティバル関係資料、書記ノート」より。
- (注 19) ただし、園だよりやメーリングリスト、園ブログなど他の媒体では、開催告知や参加呼びかけなどが行われている。
- (注 20) 清心幼稚園公式サイト「スーパーワー

ク シ ョ ッ プ パ ー テ ィ ー ! 2019 開 催」  
<https://www.seishin-gakuen.jp/info/3099.html> (2023 年 10 月 3 日情報取得)

## 引用文献

- (1) 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説。
- (2) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説。
- (3) 島津礼子 (2016) 保護者と保育者の協同的な学び: 認定こども園における保護者会の事例から。保育学研究, 54 (3), 32-42.
- (4) 鶴谷主一 (2012) 幼稚園の現場からⅧ: どうする保護者会?. 援助学マガジン, 8, 83-89.
- (5) 脇本ひろみ (2006) 私の園の保護者会活動 (9) 困難を乗り越えるパワーは、保護者会活動にあり。季刊保育問題研究, 217, 120-124.
- (6) 前掲 (3)
- (7) のぞみ保育園 父母の会 + 職員 (2005) 私の園の保護者会活動 (7) 親自身の成長の場としての父母の会。季刊保育問題研究, 213, 104-109.
- (8) 北浦順子・重田一枝 (2004) 私の園の保護者会活動 (4) 交わりの中で育つ—神奈川・安部幼稚園。季刊保育問題研究, 208, 84-89.
- (9) 田丸尚美 (2012) 幼稚園への入園が子育てにもたらすもの: 幼稚園保護者会による「子育てトーク」の実践から。福山市立女子短期大学紀要, 39, 55-60.
- (10) 藤田秀雄 (1985) 日本における PTA の歴史。立正大学文学部研究紀要, 1, 79-119.
- (11) 森村繁晴 (2019) PTA 親会員の不満とその要因構造に関する研究。放送大学審査学位論文 (博士)。
- (12) 神野潔・竹尾和子 (2017) PTA の今日的課題: 「任意加入」・「強制加入」に関する法学的・歴史学的考察。東京理科大学教

- 職教育研究, 2, 15-24.
- (13) 竹尾和子・神野潔 (2016) PTA の現状に関する学術的可視化の試み: 教育心理学・法学・歴史学の視点から. 東京理科大学紀要. 教養篇, 48, 35-52.
- (14) 前掲 (4)
- (15) 前掲 (3)
- (16) 佐藤浩代 (2022) 戦前期の東洋英和幼稚園における初期母の会活動: 母の会記録ノートの検討を中心に. 東洋英和大学院紀要, 18, 51-68.
- (17) 佐藤浩代 (2010) 教会付属幼稚園の保護者会活動と母親の育ちについての考察: 教会付属幼稚園がケアリング・コミュニティとして機能する可能性. 東洋英和大学院紀要, 6, 49-70.
- (18) 清心学園清心幼稚園 (1986) 清心幼稚園創立 90 周年記念誌. 清心学園清心幼稚園.
- (19) 清心幼稚園同窓会 (いずみ会) (2007) 清心幼稚園: 創立 110 周年記念誌. 清心幼稚園同窓会 (いずみ会).
- (20) 清心幼稚園公式サイト「園のあゆみ」  
<https://www.seishin-gakuen.jp/history>  
(2023 年 10 月 3 日情報取得)
- (21) 前掲 (18)
- (22) 前掲 (19)
- (23) 前掲 (19)
- (24) 国土交通省 (2013) 平成 24 年度 国土交通白書.
- (25) 前掲 (2)
- (26) Zittoun, T (2009) Dynamics of Life-Course Transitions: A Methodological Reflection. In J. Valsiner, P. C. M. Molenaar, M. C.D.P. Lyra, N. Chaudhary (Eds.) Dynamic Process Methodology in the Social and Developmental Sciences, 405-430. New York: Springer.